

# 人は人であることで —石井筆子 いばら路の命—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

待ち望んでいたわが子が誕生した。娘の幸せを願い幸子と名づけた。だが幸福な日々は長つづきしなかった。医師から知的障害児と告げられる。新聞で「美人笑中に泣く、哀れなり」と書き立てられた。社会の理解も国の支援も皆無の時代だ。

鹿鳴館の華と呼ばれた石井筆子（1861—1944）は近代女子教育の旗手として津田梅子と共に一躍脚光を浴びた。若き日にヨーロッパで人権思想を学び、封建的家族制度のもとで男女平等を唱え、貧困家庭の女性の自立支援などに情熱を燃やす。

しかし晴れやかな未来は一瞬で暗転した。幸子につづいて授かった次女と三女、そして夫に先立たれる。残された母と子に世間の風は冷たかった。それでも筆子は失意のどん底から這い上がり、新たに知的障害児教育に一生を捧げていく。

## フランスで学び憧れの教師に

筆子は現在の長崎県大村市で肥前国大村藩士の渡辺清・ゲンの長女として生まれた。父の清は弟の昇と共に討幕の志士として活躍し、明治維新で男爵の爵位を与えられ、貴族院議員などを歴任した。家族を呼び寄せ、筆子も11歳で上京する。

日本初の官立女子教育機関である東京女学校に第一期生として入学。同級生に洪沢栄一の長女の歌子や共立女子大学を設立する鳩山春子がいた。欧米から教師を迎えて英語による授業が行われ、卒業後も勝海舟の自宅に設けられたウィリアム・ホイットニー英語・バイブル塾に通った。そこで

ウィリアムの娘クララ、立教大学創立者で日本聖公会初代主教のチャニング・ウィリアムズ、津田塾大学を創設する津田梅子らと出会い親交を深めた。のちにクララは勝海舟の三男と結婚する。



石井筆子

語学の堪能な美貌の才媛として広く知られるようになる筆子は国賓として来日したグラント前アメリカ大統領と長崎アメリカ領事館で会見した。このときグラントは流暢に英語を話す筆子に感心してサイン入りの写真を贈っている。

オランダ特命公使の従者として1880年、19歳で渡欧し、2年間にわたって国際的な見識を深めた。とりわけ自由・平等・博愛を掲げたフランス革命による人権思想に感動し、人間の価値は家柄や性別や財力で決まるものではないと確信する。女子教育の盛んなフランスでは官邸の晩餐会にも出席し、洗練されたマナーや社交術を身につけた。

帰国後、元大村藩家老の子息で農商務省官僚のおがしまはたす小鹿島果と結婚する。親同士が決めたいいなずけで抵抗があったものの、果は教育者をめざす筆子を理解できる進歩的な考えの持ち主だった。結婚祝いに日本最古と鑑定されるアップライトピアノ

をプレゼントされ、生涯にわたって愛用する。

のちに女子学習院となる華族女学校が1885年に開校すると津田梅子と共に憧れの教師となった。筆子はフランス語、梅子は英語の授業を担当する。

### 苦難のなかで平等を訴える

華族女学校で熱心に教鞭を執る一方で筆子は女子の自立支援に精を出す。大日本婦人教育会の発足に携わり、貧困家庭の女子の職業教育を無料で行う大日本婦人教育会附属女紅女学校の開校に奔走する。広く援助を求めするために皇族、華族、政財界などの舞踏会にもたびたび参加し、鹿鳴館の華と評判になった。政府のお雇い外国人であるドイツの医師ベルツは筆子を評して「自分がこれまでに出会ったもっとも魅力ある女性の一人だ。夫人は達者に英語、フランス語、オランダ語などを話し、あえて日本の袴を洋装に利用する勇気があった」と日記に書き残している。

前途洋々の日々を過ごすなかで長女の幸子が生まれた。生まれつき虚弱体質で何度か生死の境をさまよい、約半年後に知的障害児と診断される。すがるような思いで娘と共にキリスト教の洗礼を受け、幸子の教母は津田梅子が引き受けた。

ところが筆子の試練は始まりに過ぎなかった。次女の恵子を出産後まもなく亡くし、三女の康子は結核性脳膜炎を患い知的障害児となった。筆子が31歳のときに夫も肺結核で早逝する。

たび重なる苦難のなかで1893年に日本聖公会のミッションスクール静修女学校の校長に就任し、教員として迎えた石井亮一と出会う。立教女学院の教頭を務めていた石井は1891年に岐阜・愛知地方で発生した濃尾大地震に際し、全国初の公認女性医師となった荻野吟子らの協力女子の孤児を救援する聖三一孤女学院を開設する。救援活動に共感した筆子も資金集めを率先して支援した。石井は1897年、聖三一孤女学院を滝乃川学園に改称し、本格的に知的障害児教育を開始する。

翌年、筆子はアメリカで開かれた万国婦人倶楽部大会に津田梅子と共に日本を代表して出席し、3千人の聴衆をまえに英語で講演した。帰国後、「思ひ出つるまゝ」という論考を発表し、日本ではじめて人権思想に基づく男女平等論を唱えた。

「男女の此の世にあるは云うまでもなく、同等の権利を具備するものにして男子の為に女子あらざるは女子の為に男子あらざるがごとし」と訴える。

### 挫けない意志と究極の愛

長く病床にあった三女の康子は7歳の短い生涯を終えた。残された幸子のためにも悲しみに沈んではいられなかった。命がけてこの子を守ろうと石井と再婚し、知的障害児教育に専念する。

ようやく経営が軌道に乗ってきた頃、幸子が29歳で他界した。これまで必死に幸子を育ててきた筆子の口から思わず「もう泣いてもいいのね」という言葉が洩れた。幸子の遺体を安置した部屋で筆子のうめき声のような嗚咽が聴こえてきた。

試練はとどまることなく1920年、園児の失火で火災が発生し、園児6人が死亡した。筆子も足に火傷を負い後遺症に苦しめられる。石井は経営を断念したものの、華族女学校の筆子の教え子である貞明皇后が再起を促し、経済界から洪沢栄一も支援に乗り出した。励ましの言葉と共に全国各地から続々と義援金が届き、火災から約半年後に財団法人の認可を受けて再出発する。

石井が70歳で亡くなった1937年、筆子は夫の遺志を受け継ぎ76歳で第2代学園長に就任した。学園誌『愛の泉』を発行し、1941年に太平洋戦争が勃発すると国の役に立たない者に食わせるものはないと物資の配給を常に後回しにされ、飢えや空襲や出征で園児と職員の命が失われた。

晩年は脳出血で半身不随となり、83歳で波瀾の生涯の幕を下ろす。戦後は社会福祉法人・滝乃川学園として維持され、現在に至っている。

生前はクリスマスに天使のエンブレムがついたピアノを演奏していた。天使のピアノと称され、のちに山田火砂子監督・常盤貴子主演による映画『筆子・その愛—天使のピアノ』が製作された。

筆子の一生は81歳のときに詠んだ短歌に象徴されている。「いばら路と知りてささげし身にあればいかに<sup>たわ</sup>撓まん撓むべきかは」。艱難辛苦の道とわかっていてこの身を捧げてきた。決して挫けるわけにはいかないと不屈の意志が伝わってくる。彼女は「人は人であることで神聖である」という究極の人間愛を抱いて茨の道を切り拓いた。